

かね

# 暁鐘の音

57

## 頑張れ!

### 女子大生



女子にとって超氷河期といわれている今年の就職戦線で、一つの動きが見えてきた。どうやら女性は「職場の花」という時代ではなくなったようである。というよりも、ホワイトカラーの生産性が見直されている中で、企業自身も女性社員を「職場の花」として扱わわけにはいかず、最初から「戦力」として選別し始めたようである。

このような状況を察知して、女性たちも厳しい選別のなかで、自己のアイデンティティを全面に押し出して、活躍の場を求めて積極的に海外、主にアジアに仕事を求める動きが出てきた。彼女達は、この不況の中で五社以上も会社訪問を繰り返すうちに、既成概念と既得権でこてこてに固まった国内の職場に見切りをつけたのである。

今や時代が変わることを求めているのに、既得権を持っている人達の女性に対する意識が十分に変わっていないし、第一、どう対応していいのかわからない。彼女たちも、今回無理してそのような会社に入っても、数年後にそこに自分の姿を見い出せないことに気付いたのである。

職場での男女の扱いの平等をうたった「男女雇用機会均等法」が施行されて久しいが、残念ながら一向に職

場での女性の地位が向上しない。勿論、その原因としては男性側の意識が変わらないのと、会社における職場の「仕組み」が変わらないことが大きい。女性側にも「均等法」に対する甘えからか、自助努力が足りないことも原因している。法律があるのだから「平等に扱われるべきだ」という意識の方が先にたつて、それに相応しくあるような努力を怠った面もある。もちろん全ての女子大生がそうだというのではないが、取り敢えず遊ぶために四大に行くという風潮があったことは確かである。おそらく数の上ではそのような女子大生の方が多かったかもしれない。マスコミや世間もそのような女子大生を煽った。

その結果、真面目な女子大生はその陰に隠れてしまい、「女子大生」という言葉で括られてしまった観がある。勿論、すでに触れたように、男性側にもそのような女子大生を見分ける意識がなかったし、会社の内部の仕組みも、その必要性を認めなかったのだから、もっとも、会社の仕組みというの、実のところ殆どが男性社員の意識の凝集したものである。えなくもない。

だが、図らずも今回の不況は、仕事に対する意識の高い女子大生と、そうでない女子大生をはっきりと浮き上がらせる結果となった。後者は

さつさと断念したのに対して、前者は来年の再挑戦の準備に入ったり、数年前に気付いていた人は、学生時代に既に準備をしてきたようだ。一時は、彼女達もその他大勢の女子大生の中に埋没しかかったが、就職氷河期が二年三年と続くうちに、企業の方が彼女達の存在に気付いたようである。もちろん、これも「コスト」という事情が根底にはあるが、それでも国内の経済成長が鈍化し、代わりにアジアの経済が活発化してきたという事情も、彼女達には追い風になった。

それに、男子学生よりも未知の世界に飛び込む勇気があるようだ。彼女達には見栄もへったくれもない。だいたい国内の少子化が進んで、男性は小さいときから親の「期待」が大きく、発想や決断の自由度が制限される傾向があるのに対して、

これは日本記者クラブでの会見で、「努力」という言葉に対する感想を求められたときの野茂の返事である。

「努力」という言葉は必要なさそうである。そういうえば、オリックスのイチローも同じように「努力」という言葉を嫌っていた。「自分は努力するのは嫌いだ」と言っ。もっとも、周囲の選手に言わせれば、イチローは人一倍「努力」しているという。周りの人には「努力」と書いても、本人にとっては、単に夢を実現するための当り前の練習なのである。

「努力」と捉えたとき、そこには「やらされる」といった受け身の姿勢が出てくる危険がある。だから練習していても、どこかで中断するた

女性の方がかえって選択の自由が本人に与えられてきた傾向がある。そのあたりも、積極的に海外にでようとする下地になっているかもしれない。

その上、アジアの国々の方が、働く女性にとっては動きやすいことも確かかなようである。もちろん第一線で働く女性の数は多くはないと思うが、意欲のある女性是对等に扱われているようである。日本と比べれば給料は安い、向こうで暮らすには特に不自由はないだろうし、世界銀行の試算では、アジア太平洋地域のインフラ整備の事業規模は九五年からの一年間に一兆五千億ドルに達すると見込まれている。もちろんこれが全てではない、これを下地にして、さらにいろんな分野での事業が

「そういう臭い言葉は好きではない。当り前のことを当り前にやるだけだ。大きな夢を実現したので、これからはこの夢を持続していきたい。ワールド・シリーズも経験してみたい」(野茂英雄)

「努力」の呪縛を解いたとき、そこにはもはや「受け身の自分」は存在しない。もし受け身のまま「努力」を放棄したら、彼は何も手に入れることはできないだろう。かといって

展開される。アジアは今面白いのである。「日本の企業」も、アジアに活躍の場を求めなければ生き残れない時代に入った。

その様な中で彼女達は、積極的に打って出ようとしている。さつさと新しい波の中に飛び込んでいく。時代音痴の「日本」という小さな世界に埋もれることを拒否し、「アジア」の中に自らの活躍の場を求めて出ていく。

彼女たちは、日本の女性が男性と対等に仕事をやる先掛けとなることだろう。その答えがでるのに数年かかるかも知れないが、今回新しい道筋をつけたことで、今後彼女達に続く元気な女性が出てくることだろう。

何時の時代でも、苦境が道を開くのである。

野茂もイチローも、練習が好きだとか嫌いだとかいうところに居るわけではない。生活のリズムの中に練習も試合も一緒になって入っているのだらう。好きな野球ができるのに「努力？」なんか必要ないでしょう、とでも言われそうである。

ちなみに巨人の松井選手が合宿所を出たがっていることに関連して、「合宿所を出たところが問題あります。ここに居れば、練習もできるし、二、三時間風呂にも入ることができる。僕は来年もここに居るつもりだし、何も問題ない。まだ四年目ですしやらなければならないことがいっぱいある」(イチロー)

## 今月の一言

16

